

書評

田淵句美子著『阿仏尼』

佐藤 恒雄

阿仏尼の伝記は過去にも少なくなかったが、本書は、日本文学と日本史学の最新の成果と到達点を余すところなく取り入れながら、自らが主唱してきたところを随所に加えて一段と深く的確に叙述し、創見にも満ちた、画期的な阿仏尼伝である。

阿仏尼の伝について、最も大きな問題点は、『尊卑分脈』など系図類では、父を平度繁とするのに対して、昭和以降の阿仏尼伝では、度繁は阿仏の養父であり実父は不明とされてきたことにあつた。自伝的と見られてきた『うたたね』に、「後の親とかの、頼むべきことはりも浅からぬ人しも」とある記述に従って、養父説は一時ほとんど定説化していたのであつたが、田淵氏は、しかし、それは『うたたね』という作品が発見された昭和初期からのことで、信頼すべきその他諸資料の記述を点検してみても、何れも実父とするものばかり、養父とするのは『うたたね』のみで、しかも『うたたね』の「後の親」と実際の平度繁は一致しないことを、『続古今集』（九三三）の詞書を援用したりして立言する。伝記資料としては、虚構に彩られた『うたたね』という作品に拠るべきではなく、『尊卑分脈』ほかの確実な資料に基づくべきことを強調して、極めて説得的である。そして確実な資料を追加して度繁

ならびにその一族の人たちの活動と事蹟を、簡潔かつ的確に追究してゆく。その考証と記述はほとんど完璧であるといつてよい。

阿仏とその一族は、承久の乱後、後高倉院と北白河院陳子の側近として活躍し、後堀河院、安嘉門院、尊性法親王らに密着して活動していた様子が、様々な資料から浮かびあがってくる。後高倉院皇統は総じて短命であつたが、後高倉院と北白河院陳子の間の第三皇女安嘉門院邦子内親王のみは長命で、阿仏の一族は、その北白河院・安嘉門院母子の周辺に密着して活動したという。主として日本史関係史料と先行研究を駆使して、緻密に一族の人たちの活動の跡が解明されており、圧巻である。「姉妹および姉の夫」の項で、「中院中将」と呼ばれた姉の夫は、源家定であると考証し確定したことなど、大きな成果の一つとされてよいであらう。御子左家と阿仏一族との関わりにも言及しており、両家の間に幾重にもあつた関わりからは、為家と阿仏との婚姻は、むしろ自然な、十分にありえたものだった、とも説かれている。

田淵氏の研究の軌跡としては、『阿仏尼とその時代—『うたたね』が語る中世—』（臨川書店、平成十二年）が本書に先行してあり、また更に先行して『『うたたね』の虚構性』の論もあつて、この問題は氏が一貫して追及してきた課題であつたといえる。主として文学の側面から説かれていた前著の記述に加えて、日本史学の成果と方法を取り入れて説かれる本書の視点と記述は、ほとんど非のうちどころがない。

阿仏尼伝のいま一つの論点は、阿仏が基本的に女房であつたという点にある。承久の乱後、莫大な皇室領として知られる八条院

領のほとんどは、後高倉院から安嘉門院に譲与され、阿仏の父方の一族は、その皇室の人たちに仕えて勢威があった。特に阿仏が若い頃出奔・出家して困窮していた時期を除き、生涯にわたり断続的に深く関わったのは安嘉門院邦子内親王で、一方御子左家の為家や為氏も院司として仕え、遠出の旅に供奉したり、定家女因子もある時期、安嘉門院甲斐・同高倉など和歌をよくする女房たちとともに仕えていた。安嘉門院の御所は、持明院殿（北白河院の父持明院基家の邸）の西殿で、別邸に北白河殿があったという。

その北白河殿は、慈照寺（銀閣寺）から北白川天満宮のある地域にかけての地かと想定、一方持明院殿は現在の光照院の地、方二丁半の広大な大邸宅で、後の持明院統の名の由来ともなった。北林禅尼と呼ばれた阿仏の邸もその付近にあった。田渕氏はこれら文学地理的な追究にも明るく、それには一般向きの著書ではあるが、学術的にも正確な『物語の舞台を歩く 十六夜日記』（山川出版社、二〇〇五年）の仕事に負うところが大きいと思われる。

その長い女房生活の中で培われた意識や価値観を具体的に語るものとして『阿仏の文』（「乳母のふみ」「庭のおしえ」とも）がある。広本・略本の著者をめぐって諸説あったが、略本は後人による抄出本、広本が阿仏の真作でこれは伝記資料となる、と岩佐美代子氏が推定されたのを承けて、『阿仏の文』は、女房として長いキャリアを持つ母親が、すでに内侍として勤めている年若い娘に、改めて女房としての心得を書き送った作品で、心ある女房のたしなみや価値観、文学や諸芸の勧めなど、教育的配慮に溢れているという。本質的に女房であったとする理解は、岩佐氏の論に負うと

ころが大きい。田渕氏自身の強く共感するところでもあったように、前代の『紫式部日記』消息部の記事に投影・類推して、この部分もおそらくは娘賢子（十二歳）の将来の女房出仕のために教訓的に書いた消息の竄入である可能性が大だと述べている。

阿仏の子女については、五人いて、うち二人は為家と巡り逢う以前の生まれ。一人は先の『阿仏の文』の対象とされた娘で、建長のころ母子ともに困窮の時代を過ごし、長じて後深草院の皇女を生み奉り、『十六夜日記』の頃には二十九歳ほど、思慮深く落ち着いた女性に成長して、阿仏が後事を託し最も信頼していた娘であった。いま一人は鎌倉までの道案内を買って出た山伏の「阿闍梨の君」で、これは最も年長で、『玉葉集』（二四三）歌の詞書から阿仏の鎌倉滞在中に没したかと推定されている。為家との間の男子は、定覚・為相・為守の三人で、「定覚」については、為家の子かどうか、源承は疑っているが、為家は明確に自分の子だと認知している。『澄覚法親王集』（二九二）に「定覚出家の後朝に」云々とある為家との贈答は、それだけでは状況と意味を把握できないが、『為家集』に見える同じ贈答歌とつき合わせて、為家は子息定覚を出家させてくれたことを聞いて、自分が所持していた良経筆「俊成九十賀和歌」を澄覚に贈り、数日後にその返歌が為家に送られてきたという状況を想定され、為家は定覚をわが子として大切に、天台座主大僧正澄覚に委ねて出家させ、その後も礼を尽していた、と解釈された。正解が得にくかったことだったので、田渕氏の慧眼がよい鮮やかに見える。

為家の最晩年における嵯峨中院への転居や先妻二人の動静な

ど、かなり明らかになったのを承け、それを阿仏の側の動きと連動させて、二人の恋愛から同棲へ、女あるじとしての日々、また若干の歌壇活動と意義などが解明されて、第四「為家との出会い」は構成される。最近の研究成果である、「千賀の塩竈」のキーワードを含む二人の恋愛贈答歌ほかを取り上げ、流行表現を自在に駆使した、機知あふれるやりとりが活写されている。

第五「歌道家の女主人」では、飛鳥井雅有が『嵯峨のかよひ』が引用されて、「女あるじ」として為家を支える、才気あふれる阿仏の日常の一斑が示され、また歌壇活動への参加にも言及される。最近発見された『類聚歌苑』も取り上げられて、阿仏の伝に生かされている。第六「為家の歌学との関わり」では、為兼・為子への古今伝授が具体的に語られ、為家の代筆と阿仏による歌書の書写、ならびに為家歌論の祖述を旨とした『夜の鶴』執筆の意義などに及んでいる。ただ『詠歌一体』歌論そのものの祖述が意外に乏しいのは、どのような理由によるのであろうか。第七「為家の遺言と死」は、為家の遺言状に従えば、細川庄および和歌文書すべてと『明月記』は、為相のものになるはずだった。しかし為家の没後、為氏は細川庄を為相に渡そうとしなかった。地頭職については、幕府の出先機関である六波羅で裁判が行われ、為氏が一旦勝訴していたらしい。ただその審議や裁決に不満があれば、鎌倉で裁判を受けることもできたので、阿仏は、鎌倉幕府に提訴することにしたのである。幼い子の教育と夫の所領の管理は「後家」の役割だったので、阿仏は夫の遺志に従って、唯一残された手段によって、家の権利を守ろうとしたのであった。かくて

『十六夜日記』の旅は実行され、「下向の旅」と「鎌倉滞在記」は執筆されたのであるが、ここにも文学地理的な方法と目は生かされている。なお、田淵氏には、『十六夜日記（白描淡彩／絵入写本）・阿仏の文』（勉誠出版、二〇〇九年）という装飾的で美しい本もある。しかし、両作品の施注は極めて正確で、その内容は十分に本書に生かされていると見える。

阿仏尼像は時代とともに大きく揺れ動いてきた。第十「中世から近世の阿仏尼像」、第十一「『十六夜日記』の享受と変容」、第十二「賢母像の拡大と揺動」には、そのことが端的に解説されている。「はしがき」で田淵氏は、「時代ごとに流動する阿仏尼像を、その時代・背景に戻して考え、できる限り相対化して眺めながら、阿仏尼の実像を掘り起こしていきたいと思う。そして、同時代の資料では、阿仏尼周辺にも視線をあて、周辺の人々の動きや姿からも阿仏尼の実像に迫りたいと考えている」と述べていた。その言のとおり、本書には既成のものではない、全く新しい阿仏尼の実像が至るところに結ばれていて、すぐれて刺激的でありながら、また極めて穏当な阿仏尼伝となっている。

最後に周辺の些末の瑕瑾であるが、九七頁（立ち寄った人の一首）関連で、『嵯峨のかよひ』十月一日条「冬無常」題「とりべ山」の歌は、直前の歌の作者名を承け「法眼良珍」の詠作とすべきである。左注は、おば「南御方」との関係の説明であろう。また、拙著に反映はできなかったが、五八頁関連で、為家の幼名「三名」の訓みは、「みみやう」であった。

（二〇〇九年二月 吉川弘文館 四六判 三二二頁 税込二二〇五円）